旧大野木場小学校被災校舎

1882 年に開校した大野木場小学校はにぎやかな公立学校として、保護者たちや近所の人々が学生たちと一緒に祭りやスポーツイベントに参加する地元コミュニティの中心であった。1991 年に火砕流が建物を襲い、内部を完全に破壊した。

学校の校舎は 1990 年から 1995 年の平成大噴火による被害を忘れないために災害直後の様子で残されている。噴火による破壊の大部分は、破壊的な火砕流と溶岩、急速に移動する土石流によるものだった。

火砕流とは火山噴火の際にものすごい速度で移動する熱気、灰、火山岩の混合物のことを言う。1991 年の前半期、大量の溶岩が島原の山から噴き出し、不安定な溶岩円頂丘が形成された。1991 年 6 月 3 日に、丘のひとつが崩れ、43 人が亡くなる火砕流の壁ができたが、学校は免れ、中にいる者たちは避難できた。近隣はすぐに危険地域と宣言され、学校は見捨てられた。

1991 年 9 月 15 日に別の溶岩円頂丘が崩壊し、学校はまたもや無事だった。この時、火砕流の石やがれきの大部分が学校の裏の谷へとなだれ込み、建物は灰とガス雲の影響を大いに受けた。これによる火事で窓は割れ、金属はゆがみ、周辺の植物は黒焦げになった。

学校は現在、火山の力を証明し誰も被害を受けなかったことへの感謝を表す記念建築物としてそこにある。火事で焦げた銀杏の木は次の年には芽が出始め、希望と再生の象徴として見られるようになった。